

Bangor で開かれた第8回国際海藻学会議

千原光雄*

MITSUO CHIHARA: VIIIth International Seaweed
Symposium held in Bangor, North Wales,
U. K., 17-24 August, 1974

第8回国際海藻学会議 VIIIth International Seaweed Symposium が1974年8月17日より24日まで連合王国の一つであるウェールズの Bangor 市で開催された。Bangor はロンドンのユーストン駅より北西に向い約4時間で到達する地点で、この付近はスノードン山塊に代表される山岳地帯である。従って海岸線は頗る変化に富み、生育する海藻も豊富であることが知られている。この地での海藻学会議の開催は、さきに札幌で行われた第7回会議の際に決ったもので、爾来、ノースウェールズ大学海洋科学研究所の G. E. E. FOGG 教授が組織委員長となって準備が進められていた。

今回の会議への参加者は約300名、同伴者を含むと約350名の多きに達した。なお講演の件数は150をやや下回った。これらの数字をわが国で行われた前回の会議のそれと比較すると、参加者数は日本での場合がやや多かったが、発表件数は1/6程度今回が上回った。

研究発表は海藻の分布、生態、形態、分類などを主とするセクション A と、生理、生化学などを主とするセクション B の二会場に進められ、それぞれの持時間は質問を含めて、招待講演は1時間、一般講演は20分であった。このため、会期中は朝の9時から夕方の5時頃まで講演がびっしりつまり、かなりのハードスケジュールとなった。日本からは11名が参加し(別に同伴者数4名)、8名が一般講演、1名が招待講演を行った。会議のスケジュールを記すと次のようである。

| | 午 前 | 午 後 | 夕 |
|-----|--|--------------|------------------------|
| 17日 | 到 着・登 録 | | ウェールズ大学主催の徹底 リセプション |
| 18日 | 採集会及び エクスカージョン | | 開会式特別講演 |
| 19日 | 招 待 講 演 | 一 般 講 演 A, B | リセプション |
| 20日 | 一 般 講 演 | エクスカージョン | フィルムショー |
| 21日 | 招 待 講 演 | 一 般 講 演 A, B | リセプション |
| 22日 | 招 待 講 演 | 一 般 講 演 A, B | シンポジウム晩餐会 |
| 23日 | 一 般 講 演 A, B | | ウェールズ民謡の夕べ |
| 24日 | ポストシンポジウム エクスカージョン出発 (三班にわかれ、それぞれ Isle of Man, Scot- land, Plymouth など) | | |

* 筑波大学生物科学系(茨城県新治郡桜村大字妻木字天久保)

講演内容等については、いずれ Proceedings が出版される由であるので、ここではくわしくふれない。次にこの会議で気づいたこと、あるいはこの会議の特徴的と思われた点などについて二、三記す。

今回の海藻学会議は講演、リセプション、夕食会など主な行事のすべてがノースウェルズ大学で行われたこと、同大学の二つの女子寮が開放され、参加者のほとんどがここに滞在したこと、及び人口約15,000 ならずの静かな大学町が開催地であったことのゆえか、そして勿論組織委員会の並々ならぬ努力があつてのことであるが、全体としてよく纏り、すべてが順調に進行したという印象が強い。もっとも、反面、全体として多少単調に流れ、盛りあがりに欠ける感みがあると感想を述べた参加者もあった。

ヨーロッパ各地からは自家用車をフェリーで乗り継いで参加できるという地理的条件に恵まれた地域で開催されたせいか、各国からの学生や若い研究者の参加が目立った。そのせいもあつてか、多少 premature と思われる研究内容の発表や、幼稚と思われる質問などもしばしば聞かれた。しかし、それはそれとして、若い人達が数多く出席し、熱心に討論に参加したことは、この学問分野の将来に大きい期待を抱かせ、嬉しいことであつた。

さきにも述べたように、連日多くの研究発表が相次いだか、会議の進行は実に punctual であり、極端な場合は、時間がくれば、はいそれまでであり、時間が残れば、もう一つ質問を受付けたいが、といった会議の次第であつた。お国柄というべきか。

ハハキモクについての分布や生態観察などの発表が三つも連続してアメリカやイギリスの学者達により行われた。ちなみに、この海藻は日本よりアメリカ、カナダ太平洋沿岸に移植された養殖カキについて運ばれ、その後ヨーロッパ各地にも分布域を広めたといわれており、現在湾内などに蔓延して船舶の航行に多大の迷惑を及ぼしている危険な海藻 dangerous seaweed であるので、見つけた人は直ちに通報して欲しい旨の内容のポスターがイギリス各地の大学や研究所などにやたらと貼りつけられてあつた。現在流行の環境破壊の立役者のように騒がれていたのにはいささか驚いた。それにしても、この invader の種名については、さきに遠藤吉三郎博士 (1907) が記載したハハキモクの一型を種のランクに格上げして FENSHOLT (1955) が与えた *Sargassum muticum* (YENDO) FENSHOLT が一貫して用いられ、*S. kjellmanianum* との関係について何等分類上の意見の開陳のなかつたことはいささか淋しくもあり奇異の感もあった。

発表講演全体を通じて、基礎分野の研究を扱ったものが多く、実際面、応用面を扱ったものが比較的少なかつた。また後者の分野の発表の始る前に席を立つ人が目立ったことも今回の会議の一つの特徴のように思えた。このことは、海藻の人生への利用を第一義的な目的として発足した海藻学会議が、現状では、少なくとも表面にあらわれたところでは、必ずしもその方向に沿っていないことを示すとも解釈され、今後他の純理学的な国際会合、たとえば国際植物学会議の藻類部門などの会合とどのように対比させ意義づけされるべきかなど、将来の運営上の問題をクローズアップした形でもあつた。

なお、次回の国際海藻学会議はアメリカが引受けることに決定し、開催年は1977年、開催地はカリフォルニア州 Santa Barbara 市との発表があり、そして、次回はできれば

同時通訳システムを採用した会議にしたいなどの抱負がアメリカ側より述べられた。

終りに、今回の国際海藻学会を成功裡に運営された地元連合王国の組織委員会の努力に敬意を表したい。なお、筆者のこの会議への参加は、文部省の国際研究集会参加費によった。記してお礼申上げる。

フランス藻類学会

周知の通りフランスにおける藻類学研究的歴史は長く、著名な研究者も多い。しかし藻類学会の創立は我が国よりも遅かった。1952年に日本、イギリスの藻類学会が設立され、また、1954年パリで行なわれた第8回国際植物学会議に藻類学の分科会がはじめて設けられたことなどが動機となって、BOURRELLY, CHADEFAUD, DAVY DE VIRVILLE, DEFLANDRE, FELDMANN が中心となって呼びかけを行ない、1955年2月にパリで設立総会が開催されてフランス藻類学会 Société phycologique de France が発足した。現在の会員数は外国人も含めて約150名である。活動としては年2回の集会(1回はパリで、もう1回はその他の場所のことが多い)、採集会(最近はイギリス藻類学会との共催で行なわれている)などの行事、雑誌の発行がある。機関誌 Bulletin de la Société phycologique de France は1955年に第1号が発行され、だいたい毎年1号ずつで1974年までに19号となっている。はじめは連絡誌的性格のもので、年2回の会合の記録、その時の講演の要旨、その他のニュースを内容としていたが、数年前から表紙の体裁も改まり、集会のとき発表された原著論文をのせる様になっている。

フランス藻類学会に関する連絡先は Secrétaire général Mme P. GAYRAL, Laboratoire de Biologie cellulaire et Botanique, Université de Caen, 39 rue Desmoueux, Caen 14, France である。なお会費は100 F。(吉田忠生)